

許せない北澤防衛大臣の発言

(水交目安箱より転載)

(財)水交会 研究・普及委員会幹事

岡 俊彦

3月11日午後2時46分、東北地方を襲ったマグニチュード9.0の大地震は、三陸沿岸の地方に巨大津波を誘発させ、多くの人命、財産を奪い取っていった。

地震と津波の複合脅威のなかで、東京電力福島原子力発電所は、緊急停止及び格納していた核燃料棒の冷却に失敗し、メルト・ダウン(炉心溶融)の寸前の状態である。

この危機を救おうと陸上自衛隊は、17日午前9時48分から第1発電所第3号炉に対し計4回のヘリコプターによる海水の投下を実施した。

17日正午のNHKニュースは、北澤防衛大臣の陸自ヘリコプターによる海水投下後の記者会見の様態を放映した。その中で北澤防衛大臣の「統合幕僚長の判断で……」と言う発言があり、一瞬耳を疑い、「責任を統合幕僚長に転嫁するのか。シビリアンコントロールを履き違えているのではないか」との憤りを感じたが、いや、聞き間違いか、マスコミがよくやる「つまみ食い」かもしれないと思い、夕刻、防衛省のホームページに大臣会見の記録が発表されるまで待ち、その内容を確認し、改めて義憤を感じた。

防衛省発表の北澤大臣の臨時会見(3月17日11時27分～11時37分)の概要は、次のとおりである。

最初に北澤大臣から、陸自ヘリによる冷却のための海水投下の概要が発表されたあと、記者との質疑応答となり、ある記者が、昨日(16日)実施できなくて何故今日(17日)に実施できたのかという趣旨の質問に対する北澤防衛大臣の応答のなかで、問題の発言が生じた。この部分を防衛省発表のままを記載すると次のとおりである。

Q(記者)：昨日、一旦作業を断念した時のモニタリングの数値ですが、これはどのくらいあったから、断念されたのでしょうか。

A(大臣)：これはまず、我々自衛隊の任務遂行の仕方について申し上げなければなりません。決行を指示して、最終的にはそこに到達した隊員が計測して、その濃度によって、「実行不可能」ということです。現地のパイロットに判断を任せるようになっています。それで昨日はダメでした。従ってまた、「状況は変わっていないのに、今日はどうして投下したか」ということになれば、「それを繰り返していたら成果が上らない」ということで、総理と私の重い決断を統合幕僚長が判断していただいて、統合幕僚長自らの決心の中で隊員に「今回は、冷却用の水の投下を実行すべし」ということであります。(アンダーライン：筆者挿入)

これでは、何か事故が生じた場合「責任は、統合幕僚長にある」と言わんばかりではないか。どうして「政治が責任を取る」と言い切れないのか。許せない発言である。

民主党内閣は、これまで多くのことに対して責任逃れをしてきたが、これは最大の責任逃れであり、最大の恥辱である。もし、不幸にして隊員が国難に殉じるような事態が生起すれば、彼らは浮かばれないであろう。

また、北澤防衛大臣は、大臣に就任以来「シビリアンコントロール」に意を払い、着任の訓示を始めとする数々の通達等で徹底を図っているようであるが、本人が一番「シビリアンコントロール」の神髄を理解していないことが、この発言により明確になった。

自衛隊が「運用の時代」に入ったといわれて久しい。自衛官のトップである各幕僚長や統合幕僚長が安全保障会議に参加し、意見を求められているのは、「そこまでやると死傷者がでる可能性があります」といえるのは運用に携わる自衛官だけであるからである。

しかし、そのような場合でも自衛隊の最高指揮官である内閣総理大臣は、「日本を救うためにやってくれ。後は内閣が責任を持つ」というのが「シビリアンコントロール」の神髄である。北澤大臣の先の発言は、統合幕僚長が「YES」といったから実行しましたということに他ならない。本末転倒である。

このような政府の下で多くの任務をこなさなければならない自衛官に対し頭の下がる思いがする。

彼らの武運長久と一日も早い受難者の救出と現地の復興を心から願うものである。

(2011.3.18 記)